

偽キリストとしての Obed Battius

肴 倉 宏

Obed Battius as A False Christ

Hiroshi Sakanakura

抄 録

光と闇は、*The Prairie* を構成する重要な要素であるだけでなく作品のテーマを支える重要な意味も与えられている。光と闇は、それぞれ、善と悪を象徴的に示している。Obed Battius は、闇の象徴的な意味を理解できないし自分が悪に蝕まれていることも自覚できない。その結果、彼は物語の中で偽キリストの役割を果たしてしまうのである。彼が偽キリストになってしまった原因は、科学的合理主義の思考の枠組みを脱脚できなかったことにある。

キーワード：ジェームズ・フェニモア・クーパー、「大草原」、オービド・バテウス、
偽キリスト

(2001年8月25日 受理)

Abstract

The contrast between light and darkness constitutes both structural and thematic frames of *The Prairie*. Light symbolizes good while darkness symbolizes evil. Obed Battius does not understand the symbolic meaning of darkness, and does not recognize that he is possessed by evil. As a result, he plays the role of a false Christ in the narrative. The cause is to be sought in the fact that Obed Battius does not go beyond the framework of scientific rationalism.

Key words: James Fenimore Cooper, *The Prairie*, Obed Battius, a false Christ

(Received August 25, 2001)

批評家たちは、James Fenimore Cooper の *The Prairie* (1827) に描かれた博物学者の Obed Battius についてあまり論じていない。彼等は、*The Prairie* の Obed Battius を前作の *The Last of the Mohicans* (1826) に描かれた David Gamut と同様に滑稽な人物やありふれた人物とみなし作品の中で重要な意味を与えられていると考えていないようだ。⁽¹⁾ しかし、光と闇から構成された舞台の中で *The Prairie* の Obed Battius を捉え直してみるとどうなるであろうか。光と闇から構成された舞台の中で捉え直してみると、Obed Battius は象徴的な意味を与えられた新しい人間像として浮かび上がってくるように思えるのである。そして作品を構成する舞台は、重要な意味を持つてくるように思えるのである。

光は、作品 *The Prairie* の舞台を構成する重要な要素となっている。Cooper は、物語の第 1 章と最終章の第 34 章で夜の闇が訪れる直前に燃えるように輝いている夕日を描いた。このようにして、彼は *The Prairie* の物語を光の枠組の中に置いているのである。しかし、この作品で光が果たす役割は、作品を構成する要素として重要であるだけでない。それは、作品のテーマを支える重要な意味をも与えられているのである。Cooper は、夕日に示される光が象徴的な意味を持っていることを示そうとしたのである。第 1 章で Cooper は、夕日の場面を次のように描いている。

The sun had fallen below the crest of the nearest wave of The Prairie, leaving the usual rich and glowing train on its track. In the centre of this flood of fiery light a human form appeared, drawn against the gilded background, as distinctly, and seemingly as palpable, as though it would come within the grasp of any extended hand. The figure was colossal; the attitude musing and melancholy, and the situation directly in the route of the travellers. But embedded, as it was, in its setting of garish light, it was impossible to distinguish its just proportions or true character. (14-15)⁽²⁾

Natty Bumppo は、小高い丘の上になたて燃えるように輝いている夕日を満身に浴びている。この場面にやってきた Ishmael Bush は、Natty Bumppo を照らし出している夕日の背後に自然現象を超えた宗教的な意味を読み取ったのであろうか、一瞬、“superstitious awe” (15) に打たれ立ち止まってしまうのである。Cooper の作品における光の使い方に関心を寄せている Donald A. Ringe は、*The Prairie* の冒頭の夕日の場面に注目して “the light... surrounds the trapper with a halo of light, and, in effect, almost sanctifies him.” と述べている。⁽³⁾ 冒頭の夕日は、宗教的な意味が込められていると Ringe は指摘しているのである。

光に与えられた象徴的な意味は、最終章の第 34 章でさらに強調されている。死を目前にしている Natty Bumppo が、Duncan Uncas Middleton, Paul Hover, Pawnee 族の Hard-Heart たちに囲まれて夕日を見つめている。Cooper は、その様子を次のように描いている。

The trapper had remained nearly motionless for an hour. His eyes, alone, had occasionally opened and shut. When opened his gaze seemed fastened on the clouds which hung around the western horizon, reflecting the bright colours and giving form and loveliness to the glorious tints of an American sunset. The hour—the calm beauty of the season—the occasion all conspired to fill the spectators with solemn awe. (385)

夕日が放つ光は、ここでは、Natty Bumppo をはじめとして夕日を見つめているものたちの心に畏敬の念を呼び起こしている。そして、それから間もなく、Natty Bumppo は両側を支えられながら立ち上がり、“with a fine military elevation of the head, and with a voice that might be heard in every part of that numerous assembly” (385) と描かれているように姿勢をただし大きな声で“Here!” (385) と応答している。夕日に示された光は、人間の全身全霊を持って応答しなければならない神的存在を象徴的に示しているのである。

Cooper は、*The Prairie* の第 1 章と最終章で栄光に輝く夕日を描いた。そうすることによって、彼はこの作品を包む枠組みを作り上げた。しかも、作品を包む枠としての光は、夕日が織り成す色彩的な美しさを強調するためではなく、明らかに神的な意味を帯びる象徴性を与えられているのである。

The Prairie の舞台を構成するもう一つの重要な要素は、闇なのである。Cooper は、物語の冒頭の夕日の場面に続いて、すなわち第 1 章後半から第 6 章にかけて闇の場面を描いた。闇は、光と同様に作品のテーマを支える重要な意味を与えられている。Cooper は、闇に与えられている意味を Siouxes 族を通して示している。“the Ishmaelites of the American deserts” (40) と描かれている Siouxes 族は、Natty Bumppo に “the miscreants!” (37) や “the thieves” (38) と言われている。彼等は、倫理的に腐敗している連中なのである。Cooper は、夜陰に紛れて獲物を求めて徘徊している Siouxes 族を “A band of beings, who resembled demons rather than men sporting in their nightly revels across the bleak plain” (37) と述べている。Siouxes 族は、人間というより悪魔に似ているというのである。このような連中を包み隠す闇は、悪の跳梁を許す象徴的な意味を与えられているのである。

闇に与えられている意味は、Siouxes 族の族長 Mahtoree を通して一層強調されている。Cooper は、Mahtoree を描くとき蛇のイメージをふんだんに用いている。たとえば、略奪を企む Mahtoree が Ishmael Bush 一家のキャンプに忍び込む様子は、次のように描かれている。

The progress of Mahtoree was now slow, and to one less accustomed to such a species of exercise, it would have proved painfully laborious. But the advance of the wily snake itself is not more certain or noiseless, than was his approach. (50)

Mahtoree は、ずる賢い蛇が音もたてず確実に獲物に近づくよりも巧妙に Ishmael のキャンプに忍び込むのだ。彼は、Ishmael Bush 一家の一人一人の顔を覗き込み寝静まっていることを確かめたうえで、キャンプの中を歩き回る。Cooper は、Mahtoree の様子を “he stalked through the encampment, like the master of evil, seeking whom and what he should first devote to fell purposes.” (53) と描いている。残忍な目的を遂げるための犠牲者を探している Mahtoree は、悪の化身なのである。Mahtoree の暗躍を許す闇は、倫理的な腐敗を隠し悪の跳梁する象徴的な意味を与えられているのである。

Cooper は、まず初めに物語の舞台を設定した。彼は、象徴的な意味を帯びる光を物語の枠組として設定している。神的な意味を与えられた光の枠組は、その中に倫理的な腐敗を隠し悪の跳梁する恐ろしい闇を包み込んでしまうものなのである。このように Cooper

が *The Prairie* の冒頭で見せる光の舞台は、これから繰り広げられる事柄に関する問題の中心が、光か闇に深いかかわりを持つ問題であることを予表しているのである。冒頭の光の場面は、光が象徴的に表わすものを信じるか、それとも闇の世界にとどまるかという倫理的な問題が、*The Prairie* の中心課題であることを暗示しているのである。

Obed Battius が、光と闇から構成されている *The Prairie* の舞台に登場する。彼は、物語の第6章から登場している。彼が登場する第6章は、夕方から始まった物語の第1日目があり第2日目が始まろうとする直前の夜明け前の “a gray light” (67) の場面なのである。“fellow of several cis-atlantic learned societies” (67) で “M.D.” (67) の学位を有する博物学者の Obed は、博物学の標本にする貴重な動植物や鉱物を探し求めて出かけた小探検旅行から Ishmael Bush のキャンプにちょうど戻ってきたところなのである。ちょうどそのとき、恋人の Paul Hover と逢引するつもりで Ishmael のキャンプを抜け出してきた Ellen Wade は、薄暗がりの中で Obed に会い驚いて “I did not expect, Doctor, to meet you, at this unusual hour.” (68) と言う。Obed は、夜明け前の薄暗がりの中で活動している理由を “All hours, and all seasons are alike, my good Ellen, to the genuine lover of nature...and he who does not know how to find things to admire by this gray light, is ignorant of a large proportion of the blessings he enjoys.” (68) と Ellen に説明する。彼は、本当の博物学者は季節や時間にかかわらず自然を観察するものだという。Obed は、自分が薄暗がりの中で行動している理由を自然を愛する博物学者としての当然の行為だと Ellen に話して聞かせる。こうして Cooper は、夜明け前の薄暗がりの中で活動する Obed が神的な意味を与えられた光よりは倫理的な腐敗を隠し悪の跳梁する闇の側に属する人物であることを暗示しているのである。

闇に対する Obed の姿勢は、彼と Ellen との会話を通して具体的に示されている。彼は、夜に出歩く理由を二つのことと結び付けて説明している。一つは、自然科学的理由である。もう一つは、Obed の仕事の性質とのかかわりである。実際、彼は、自分が夜に出歩く理由を Ellen に次のように説明している。

I am abroad at night, my good girl, because the earth in its diurnal revolutions, leaves the light of the sun, but half the time on any given meridian, and because what I have to do, cannot be performed in twelve or fifteen consecutive hours. Now have I been off, two days from the family, in search of a plant, that is known to exist on the tributaries of La Platte, without seeing even a blade of grass that is not already enumerated and classed. (68-69)

Obed は、地球の自転が昼と夜の交代をもたらす原因であり、彼の仕事は昼だけして夜になつたからやめるといふ訳にいかないのだという。博物学者としての仕事は、地球の自転による昼と夜の交代にもかかわらず続けなければならないものなのだ話す。彼が二昼夜程 Ishmael Bush 一家から離れて探検に出ていたのも、博物学者としての仕事のためなのである。博物学者 Obed は、昼と夜の交代を自然科学的現象として合理的に明快に説明してみせる。彼は、闇に与えられている象徴性を理解できないのである。

闇の象徴性を理解できない Obed は、Mahtoree に与えられている象徴性を理解することもできないのである。第27章の Obed に注目して見る。Siouxes 族に捕えられている Obed は、“the most approved fashion of Sioux taste” (303) に従い “A gallant scalp-lock” (303) を残して頭髪を剃られ頭や顔に “Thick coats of paint” (303) が塗られている。しかも残された彼の頭髪には “sundry toads, frogs, lizards, butterflies, etc.” (304) が、博物学者としての Obed を嘲るようにつけられている。Siouxes 族の連中は、奇妙な姿をした Obed を “the Evil Spirit of the Pale faces” (303) とみなし恐れている。Obed は、悪霊と見られていることも知らずに悪の化身 Mahtoree の前に引き出され殺される危機に直面しているのである。彼は、Siouxes 族の “dark, savage, and obdurate countenances” (304) の中に Natty Bumppo を見つけるとほっとして自分の心情を吐露する。彼は、Natty Bumppo に次のよう言う。

I esteem myself happy, that a man who speaks the vernacular is present, to preserve the record of my end. You will say that after a well spent and glorious life, I died a martyr to science, and a victim to mental darkness. As I expect to be particularly calm and abstracted in my last moments, if you add a few details concerning the fortitude and scholastic dignity with which I met my death, it may serve to encourage future aspirants for similar honour, and assuredly give offence to no one. (305)

Obed は、自分が学問なかばにしてインディアンによって殺された経緯を伝えてくれと Natty Bumppo にいう。彼は、志なかばで無知蒙昧なインディアンの犠牲にされるというのである。Obed は、Siouxes 族を学問の光に照らし出されていない知的に遅れた連中とみなしている。彼は、無知蒙昧なインディアンと同じ格好をさせられているのだがそのことには気付かず Siouxes 族を侮蔑している。彼は、Mahtoree を迷信を信じるインディアンとみなすけれど悪の化身として理解できないのである。Mahtoree の象徴性を理解できない Obed は、皮肉にも Mahtoree と同じように悪霊に取りつかれているのだが自分が悪に蝕まれていることも自覚できないのである。

闇や Mahtoree に象徴的な意味を読み取れない Obed は、Inez と Ishmael Bush 一家の係わりも深く理解することができない。Obed は、闇が倫理的な腐敗を隠し悪の跳梁する恐ろしいものであることを理解できなかった。このような彼は、Inez の黒髪に与えられている象徴性を理解できないのである。彼は、Inez の黒髪の背後に潜んで人間性を蝕んでいる悪の化身 Mahtoree の黒い姿を洞察できない。彼は、Inez の黒髪をスペイン系の人種的・民族的特徴を表わしていると理解しているのである。Inez の黒髪に与えられている象徴性を洞察できない Obed は、Ishmael Bush 一家に与えられている象徴性をも認識できない。Ishmael Bush 一家は、倫理的に荒廃した一家として描かれている。彼等を背後から操っているのは、悪の化身 Mahtoree なのである。⁽⁴⁾ Mahtoree に操られている Ishmael Bush 一家は、腐敗堕落している人間の古い世界を象徴的に示している。⁽⁵⁾ Obed は、Ishmael Bush 一家が倫理的に腐敗していることは知っている。実際、彼は、Inez を誘拐し隠している Ishmael を “the man...is sadly forgetful of the obligation of honesty!” (126) といっ

て非難している。しかし彼は、Inezの黒髪の時と同様に Ishmael Bush 一家の背後にいる悪の化身 Mahtoree の黒い姿を読み取れない。物事の背後に込められている象徴性を理解できない Obed は、墮落した世界で悪に蝕まれている Inez の魂の苦悩を共感できないのである。Obed は、人間の墮落性と世界の墮落性が不可分の関係にあることを認識できないのである。

人間と世界の墮落性を理解できない Obed は、自分が墮落した世界の一員であることにも気付かないのである。彼は、Ishmael Bush 一家と契約を交し旅をしている。Ishmael は、開拓生活に伴う怪我や病気を心配して医者が必要としていた。Obed は、Ishmael の移動生活が博物学の標本を集めやすくすると考えた。彼等は、互いの利害が一致したので契約を交し旅をしているのである。Cooper は、Ishmael と Obed のことを次のように述べている。

He [Ishmael] had no respect for any learning except that of the leech ; because he was ignorant of the application of any other intelligence, than such as met the sense. His deference to this particular branch of science had induced him to listen to the application of a medical man, whose thirst for natural history had led him to the desire of profiting by the migratory propensities of the squatter. This gentleman he had cordially received into his family, or rather under his protection, and they had journeyed together, thus far through the Prairies, in perfect harmony. (66-67)

Ishmael と Obed は、しばらくの間仲良く旅をしているのである。Obed と Ishmael の契約は、Obed が Ishmael Bush 一家に象徴的に示された腐敗墮落した世界にどっぷりと漬かり、はびこっている倫理的腐敗を免れ得ないことを物語っている。Obed は、Ishmael と同様に倫理的に腐敗した人間なのである。しかし彼は、その自覚を持たないのである。実際、彼は、Ishmael にだまされていたと分かると “It is void! I have been deceived in the premise ; and I, hereby, pronounce a certain compactum, entered into and concluded between Ishmael Bush, squatter, and Obed Battius M.D. to be incontinently null and of non-effect.” (148) と言う。彼は、Ishmael との契約破棄を宣言する。彼は、こうして Inez を誘拐し隠している Ishmael Bush 一家の悪事に荷担せず済んだと胸を撫で下ろすのである。彼は、Ishmael Bush 一家に具現された墮落した世界から超然と離れ自分の身の清らかさを保ちえたと思っている。Obed は、Ishmael と倫理的にさして変わらぬ腐敗墮落した人間であるにもかかわらず Ishmael よりは倫理的に高潔であると思いつけている。Obed は、自分が倫理的に腐敗した人間であることを全く自覚できないのである。

Obed は、悪に蝕まれた人間であることを自覚しないだけでない。彼は、人間が神になりえると豪語するのである。彼は、知識の有無が人間の質を決定すると言う。実際、Obed は、Natty Bumppo に次のように話す。

Man may be degraded to the very margin of the line which separates him from the brute, by ignorance ; or he may be elevated to a communion with the Great Master Spirit of All by knowledge—nay, I know not, if time and opportunity were given him,

but he might become the Master of all learning, and consequently equal to the great moving principle. (180)

Obed は、無知は人間を動物のレベルに墮落させるが、逆に知識は人間をあらゆる知識の源である神に近づけると主張する。彼は、人間に与えられている理性の力によって神にすらなれると大胆に言うのである。Natty Bumppo は、Obed のこの発言を聞くと“*This is neither more nor less than mortal wickedness!*” (181) と言って Obed の思い上がりを非難するのだが、Obed は Natty Bumppo の非難に耳を傾けようとしない。二つの大学を卒業し博士の学位を持つ知識人 Obed は、自分が神のような存在であることを自負しているのである。悪に触まれた人間であることを自覚しない Obed は、自分が神のような存在であるとうぬぼれてしまうのである。

Obed は、神のような存在であると主張するだけでない。彼は、人間の中に潜む悪を取り除くことができるというのである。第22章の Obed と Natty Bumppo の対話に耳を傾けてみることにする。Natty Bumppo は、“*I have seen much of the folly of man...To my weak judgement it hath ever seem'd that his gifts are not equal to his wishes...If his power is not equal to his will, it is because the wisdom of the Lord hath set bounds to his evil workings.*” (240) と Obed に話す。彼は、人間が墮落した不完全な存在であることを強調している。Natty Bumppo のこの主張に対して Obed は、“*It is much too certain that certain facts will warrant a theory which teaches the natural depravity of the genus; but if science could be fairly brought to bear on a whole species, at once, for instance, education might eradicate the evil principle.*” (240) と言い返す。Obed は、学問の発達とその成果としての教育が人類にあまねく普及するようになれば人間の中に潜む悪を取り除くことができると Natty Bumppo に反論するのである。彼は、人間の生まれながらの墮落性を受け入れないのである。博物学者 Obed は、神のような存在として悪の支配から人間を解放することができるというのである。Obed は、こうして Ishmael Bush 一家に囚われている Inez を解放しようとする。

Obed は、Ishmael Bush 一家の知的レベルを向上させることが Inez の解放に繋がると考えるのである。Ishmael Bush 一家は、無知で動物的な連中としても描かれている。実際、Cooper は、Ishmael を “*The inferior lineaments of his countenance were coarse, extended and vacant; while the superior, or those nobler parts which are thought to affect the intellectual being, were low, receding and mean*” (12) と描写している。Ishmael は、知的部分のある頭は後退してみすばらしいのである。知的能力を欠く Ishmael は、しばしば “*overfatted beast*” (14), “*a well fed and fattened ox*” (122), “*an awakened lion*” (145) と動物のイメージで描かれている。Ishmael は、知的判断力を欠いた動物的な男なのである。学問や教育の力に絶大な信頼を置く Obed は、Ishmael Bush 一家の無知が倫理的腐敗の原因であるとみるのである。彼は、一家の知的レベルを向上させることで腐敗の原因を取り除き悪を克服できると判断する。そのため彼は、Ishmael の砦にいる連中に知的レベルの高い講義をするのである。博覧強記の博物学者 Obed は、守備隊長を任されている Ellen Wade

に契約に関して講義をする。たとえば、彼は、“A compactum which is entered into, through ignorance or in duress, is null in the sight of all good moralists” (150) と言って道徳哲学者たちの見解を披露する。さらに彼は、“by Payley, Berkeley, ay even by the immortal Binkerschoeff” (151) と当時の著名な学者たちの名前を列挙し契約に関する知識を教授する。彼は、Ishmael の娘たちには次のように教え諭す。

Hetty, hast thou forgotten who appeased thine anguish when thy auricular nerves were tortured by the colds and damps, of the naked earth! and thou, Phoebe, ungrateful, and forgetful Phoebe! but for this very arm, which you would prostrate with an endless paralysis, thine incisores would still be giving thee pain and sorrow! Lay, then, aside thy weapons, and hearken to the advice of one who has always been thy friend. (149)

Obed は、Hetty の聴覚神経や Phoebe の歯痛を直したことに訴え医学が苦痛を取り除くことを教える。彼は、砦の守備隊に鉄砲で撃たれるかもしれない危険を顧みず持てる医学や法律学の知識を総動員して Ellen や Ishmael の娘たちの知的レベルを高めようとする。こうして Obed は、無知のもたらす悪から彼等を救い囚われている Inez を解放しようとする。実際、Obed は、“...all my aspirations after knowledge, as I humbly believe, are, first, for the advancement of learning, and secondly, for the benefit of my fellow-creatures.” (104) と言う。彼は、学問の発展と人類救済と言う高邁な目的のため自分の命を犠牲にしようとするのである。Obed は、自分が悪に蝕まれていることを自覚しないで悪から人類を解放する救済者の役割を果たそうとするのである。

人類を悪から解放する救済者 Obed は、Hard-Heart と対比されている。第24章に描かれた川渡りの場面に注目して見る。Hard-Heart は、復活のメシヤにして最後の審判のときの審判者として描かれている。⁶⁾ Hard-Heart は、自分の持っている野牛の皮を巧みに細工して舟を作り Inez と Ellen を対岸に渡す。次に、彼は、Natty Bumppo と Obed を渡すために戻ってくるのである。Natty Bumppo が先に舟に乗り込み Obed に乗るように誘うと、Obed は “this is a most unscientific bark!” (263) とか “It is impossible that any vessel constructed on principles so repugnant to science can be safe.” (263) と言って科学文明の恩恵から程遠い無知蒙昧なインディアンの考案した代物に身を任す訳にいかないといい、乗るのを拒否する。ところが、Mahtoree が率いる Siouxs 族が迫ってくるのを見ると、彼は急いで非科学的に作られた舟に乗り込む。Hard-Heart は、Siouxs 族の撃つ弾丸や矢の嵐の中を命の危険を犯して Natty Bumppo と Obed を対岸に渡そうとする。Natty Bumppo は、若く勇敢な Hard-Heart が年老いた Natty Bumppo と Obed のため犠牲になるのを心苦しく思うのである。そのため Natty Bumppo は、Obed に不躰に “Do you greatly value life, friend Doctor?” (265) と尋ねる。彼の質問に対して、Obed は “Not for itself. But exceedingly, inasmuch as Natural History has so deep a stake in my existence. Therefore—” (265) と答えている。彼は、個人としては命は大して重要でないが学問と人類のことを考えると自分の命は重要だという。命は大切だという Obed の意見を聞いたうえで Natty Bumppo は、Obed に次のように提案をする。

Now is life as precious to this young Pawnee as to any Governor in the States, and he might save it, or at least stand some chance of saving it, by letting us go down the stream, and yet you see he keeps his faith, manfully and like an Indian warrior. For myself, I am old, and willing to take the fortune that the Lord may see fit to give, nor do I conceit that you are of much benefit to mankind, and it is a crying shame if not a sin, that so fine a youth as this should lose his scalp for two beings so worthless as ourselves. I am therefore disposed, provided that it shall prove agreeable to you, to tell the lad to make the best of his way, and to leave us to the mercy of the Tetons. (265)

Natty Bumppo は、Hard-Heart を助けるため自分と Obed を置き去りにしてくれるように提案するつもりだと Obed に語りかける。Natty Bumppo のこの提案を聞いた Obed は、“I repel the proposition, as repugnant to nature, and as treason to science!...Our progress is miraculous and as this admirable invention moves with so wonderful a facility a few more minutes will serve to bring us to land.”(265)と猛烈な勢いで Natty Bumppo に反対する。Obed は、Mahtoree が率いる Siouxs 族に捕まって殺されるかもしれないと思うと非科学的な舟を素晴らしいと賛えるし、命それ自体は惜しくもないといったのけた舌の根も乾かないうちに生き延びることを願う始末である。彼は、学問や人類のためという崇高な理想を掲げるけれども自分の命を救うためには主義主張をあっという間にながかり捨ててしまうあさましい男なのである。Natty Bumppo は、“Lord, what a thing is fear! it transforms the creatur's of the world and the craft of man, making that which is ugly, seemly in our eyes, and that which is beautiful, unsightly!”(265)と言って Obed の変節漢ぶりに呆れてしまうのである。このような Obed と対照的に、Hard-Heart は、Siouxs 族の撃つ弾丸や矢を恐れず泰然として Natty Bumppo と Obed の話し合いが終わるまで待ち彼等を対岸に渡す。Hard-Heart は、人間を救うために世に遣わされたメシヤなのである。Natty Bumppo は、Obed に Hard-Heart のことを “...you see, the truth is in the boy, and make a red-skin once your friend he is yours so long as you deal honestly by him.”(262)と話している。Natty Bumppo は、Hard-Heart をメシヤと一度信じれば神の恵から離れないようにメシヤ Hard-Heart が信者の死に至るまで守り支えてくれるというのである。メシヤ Hard-Heart は、自分の命を捨てても Natty Bumppo と Obed を救おうとしている。彼と対照的に Obed は、人類を悪から解放すると言うものの自分個人の命を救うことしか考えていないのである。Obed と Hard-Heart の対比は、Obed が人類の救済者ではなく偽キリストに過ぎないことを示している。

偽キリスト Obed は、物語の第31章でメシヤ Hard-Heart に裁かれているのである。第31章は、裁判の場面である。この場面で重要な役割を果たしているのは、“arbitrary judge”(342)と述べられた Ishmael Bush ではなくメシヤ Hard-Heart である。すでに述べたように Hard-Heart は、復活のメシヤであるだけでなく最後の審判の時の審判者としても描かれている。Hard-Heart は、Ishmael Bush 一家に具現されている腐敗堕落した人間の世界に囚われているすべての人の宗教的・倫理的行いを裁こうとしているのである。第31章の裁判の

場面は、メシヤ Hard-Heart が臨んで行われる最後の審判を象徴的に描いているのである。Obed は、審判者としての Hard-Heart の前に立たされている。彼は、闇の象徴性を理解できなかったし Mahtoree を悪の化身と認識することもできなかった。彼は、Inez と Ishmael Bush 一家の係わりにも象徴的な意味を読み取れなかった。その結果、Obed は自分も倫理的に墮落した人間であることを自覚できなかった。そればかりか彼は、Ishmael Bush の倫理的腐敗を指弾し自分は Ishmael より倫理的に潔癖であると思いつこんでいた。さらに彼は、人類を悪の支配から解放しようとしていた。彼は、メシヤ Hard-Heart になり代ってメシヤの如く振る舞おうとしたのである。悪に触まれていることを自覚しないでメシヤの如く振る舞おうとした Obed の思い上がりだが、メシヤ Hard-Heart の前で明らかにされ裁かれているのである。メシヤの如く振る舞おうとしていた Obed は、実は、偽キリストなのである。

Obed が偽キリストの役を演じてしまった原因をさらに究明するためには、Obed と Natty Bumppo の関係に注目してみる必要がある。Natty Bumppo は、*The Prairie* では毘師として描かれている。毘師は、高齢になり体力の衰えた Natty Bumppo の生計を支える職業であるばかりでなく、象徴的な意味も与えられている。Natty Bumppo は、メシヤ Uncas と Hard-Heart の死と復活について語る伝道者であるばかりでなく聖餐式の執行者としても描かれている。⁽⁷⁾ 彼は、Chingachgook と Uncas の係わりに描かれた愛する独り子を犠牲にしてまで人間を悪より救い出だそうとする神の愛、Hard-Heart の復活にみられる死からでさえ生を造り出す神の豊かな創造力そして終末の接近について語り、荒野であった人々や老犬の Hector を聖餐式に招くのである。⁽⁸⁾ 彼は、神や人間そして自然との交わりを深める宗教的な人間なのである。このような Natty Bumppo に対する Obed の態度は、Obed の宗教的な真理に対する姿勢を示すことになるのである。

Obed は、第7章で Natty Bumppo に初めて会うのである。彼は、Ishmael Bush と Natty Bumppo が話をしているのを聞きながら途中で口をはさむ。Siouxes 族に家畜を略奪された Ishmael は、Natty Bumppo を Siouxes 族の仲間だろうと疑い “Since you own your kin, I may ask a simple question. Where are the Siouxes who have stolen my cattle?” (76) と詰め寄る。不当な嫌疑をかけられた Natty Bumppo は、“Where is the herd of Buffaloe, which was chased by the Panther across this plain, no later, than the morning of yesterday.” (76) と逆に Ishmael に問い返す。二人のやり取りを聞いていた Obed は、Natty Bumppo が “Buffaloe” (76) という言葉を使ったところで二人の話に割って入る。そして彼は、Natty Bumppo に次のように言う。

Friend...I am grieved when I find a venator or hunter of your experience and observation, following the current of vulgar error. The animal you describe, is in truth a species of the bos ferus or bos sylvestris, as he has been happily called by the poets, but, though of close affinity it is altogether distinct, from the common Bubulus. Bison is the better word, and I would suggest the necessity of adopting it in future, when you shall have occasion to allude to the species. (76-77)

Obed は、荒野での生活経験の豊かな Natty Bumppo が “Buffaloe” (76) という通俗的な言葉を使ったことを嘆き今後 “Bison” (77) という正式な言葉を用いることを薦めている。Natty Bumppo が “Bison or Buffaloe, it makes but little matter.” (77) と言うと、すかさず Obed は次のように言う。

Pardon me, venerable venator; as classification is the very soul of the Natural Sciences, the animal or vegetable, must, of necessity, be characterised by the peculiarities of its species, which is always indicated by the name. (77)

Obed は、自然科学における分類と名称の重要性を強調しているのである。彼は、Natty Bumppo が “the grizzly bear” (79) というとすぐさまそれを訂正するように “Ursus horribilis!” (79) とラテン語でいう。“the Frenchman de Buffon” (70) の名声を超えたいと願っている彼は、しつこいほど分類と名称の正確さにこだわり Natty Bumppo を教え諭すのである。Natty Bumppo を “venerable venator” (77) と呼ぶ Obed は、Natty Bumppo を経験豊かであるけれども博物学の分類や名称に関する正確な知識を持たない年老いた獵師とみなしているのである。Obed は、Natty Bumppo をメシヤ Uncas と Hard-Heart の死と復活について語る伝道者として理解できないのである。

Obed は、Natty Bumppo を伝道者として理解できないばかりか聖餐式の執行者としても理解できないのである。第9章の野牛を食べる場面に注目してみる。この場面で Natty Bumppo は、Paul Hover に野牛の肉を切り分けて食べさせている。野牛の肉を食べることは、象徴的な意味が与えられている。それは、野牛の皮の背後に隠れて死を克服した Hard-Heart を食べるだけでなく、Hard-Heart と “brothers” (277) といわれている Uncas を食べることに通じているのである。野牛の肉を食べることは、人間に対する神の愛や神の豊かな創造力に感謝し終末の接近を先取りして味わうことなのである。Natty Bumppo は、このような象徴的な意味を込められた儀式に “We are not ravenous beasts, eating of each other, but Christian men, receiving thankfully that which the Lord hath seen fit to give.” (98) と言って Obed を招く。ところが、Obed は、野牛の肉を食べることの象徴的な意味を理解することができないのである。彼は、“a morsel of the hump” (99) を食べながら Natty Bumppo に次のように言う。

I should be ashamed of my profession...I ought to be ashamed of my profession were there beast, or bird, on the continent of America that I could not tell by some one of the many evidences which science has enlisted in her cause. (99)

Obed は、食べている肉を証拠にして動物の種類を同定できなければ博物学者として恥ずかしい限りだという。彼は、肉を食べることに象徴的な意味を読み取るのではなく博物学の知識を披露する機会とみなしているのである。肉を食べることの象徴的な意味を理解できない彼は、Natty Bumppo を聖餐式の執行者としても理解できないのである。彼は、Natty Bumppo の語るメシヤ Uncas と Hard-Heart の死と復活の話に耳を傾けないのである。Obed は、Natty Bumppo の語る宗教的な真理を受け入れないのである。

Natty Bumppo の象徴性を理解できない Obed は、人間と自然の関係をも歪めてしまう

のである。第9章の Natty Bumppo と Obed の対話に耳を傾けてみることにする。二人の間で Ishmael Bush の幌馬車に隠されているものは何かが話題になる。Obed は、博物学に未だ分類されていない動物が隠されていると主張する。Obed の意見を聞いた Natty Bumppo は、彼の意見を疑問に思い次のように言う。

Here is Hector, come of a breed with noses as true and faithful as a hand that is all-powerful has made any of their kind, and had there been a beast in the place, the hound would long since has told it to his master. (105)

Natty Bumppo は、Ishmael Bush の幌馬車に隠されているものが動物なら愛犬の Hector が鋭く察知して教えているはずだという。彼は、Obed の博物学者としての判断力よりも Hector の知覚能力を高く評価している。Obed は、Hector の知覚能力と博物学者としての合理的な認識能力を比べられたことに屈辱を感じるのである。そのため彼は、Natty Bumppo に次のように食って掛かる。

Do you pretend to oppose a dog to a man! brutality to learning! instinct to reason!...In what manner, pray, can a hound distinguish the habits, species, or even the genus of an animal, like reasoning, learned, scientific, triumphant man!(105)

Obed は、理性を備えた合理的で科学的な人間が動物の Hector よりはるかに優れているというのである。Hector は、Natty Bumppo の愛する犬であるだけでなく象徴的な意味をも与えられている。Hector は、人間を除いた神の被造物全体を象徴的に示す代表として描かれている。⁹⁾このような意味を与えられた Hector に対する Obed の姿勢は、動物や植物を含む自然に対する彼の姿勢を示すことになる。Hector を見下す Obed は、理性を備えた合理的な人間を自然界の頂点にいる存在とみなし人間以外の存在を一段と低いものとして観るのである。彼は、神の被造物として人間も動植物も対等な存在であることを認めようとしないのである。彼は、支配者として人間が自然界に君臨していると考えている。Natty Bumppo の語る宗教的な真理を受け入れない Obed は、自然との暖かい交わりを持つようとしないのである。

自然との暖かい交わりを持つようしない Obed は、自然のしっぺ返しを恐れるのである。彼は、博物学の発展のため動植物や鉱物の標本を採取している。彼の標本採集は、動植物をそれらが生きている環境から引き離し動植物の生命を奪うことでもある。実際、Natty Bumppo は、博物学者の標本採集について次のようにいう。

They slay the buck, and the moose, and the wild cat, and all the beasts that range the woods, and stuffing them with worthless rags, and placing eyes of glass into their heads, they set them up to be stared at, and call them the creatur's of the Lord ; as if any mortal effigy could equal the works of his hand!(101)

Natty Bumppo は、博物学者が動物と生息環境の有機的な関係を無視していると非難している。生き物と環境の生きた関係を無視して標本集めをする Obed は、自然の報復を恐れている。彼は、砂塵を巻上げて何千頭もの野牛が迫ってくるのを見ると恐怖心に捕えられてしまうのである。Cooper は、迫り来る野牛を見ている Obed を次のように描写してい

る。

The faculties of Doctor Battius were quickly wrought up to the very summit of mental delusion. The dark forms of the herd lost their distinctness and then the Naturalist began to fancy he beheld a wild collection of all the creatures of the world rushing upon him in a body as if to revenge the various injuries, which in the course of a life of indefatigable labour in behalf of the natural science, he had inflicted on their several genera. (200)

Obed は、野牛というよりは世界中の生き物が一団となって押し寄せてきて彼に復讐しようとしていると思込んでいる。自然に破壊行為を繰り返してきてやましい思いを感じている Obed は、自然の猛威に恐怖感を感じている。自然との暖かい交わりを持つとしない Obed は、自分の気持ちを自然に投影して自然も人間と暖かい交わりを持つとしないと思込んでいるのである。自然との暖かい交わりを持つとしない Obed は、人間と自然の関係を敵対的な関係と錯誤してしまうのである。

Obed は、人間と自然の関係を歪めて見るだけではない。彼は、自然の仕組の複雑さや多様性を研究する博物学の研究をも歪めてしまうのである。第10章の Obed と Middleton との係わりに注目する。Middleton は、Paul に肉を食べるように勧められると “I know too well the merits of a bison’s hump, to reject the food.” (109) と言う。彼は、一目見ただけで肉の種類と肉の部位をいい当てるのである。しかも彼は、Natty Bumppo や Paul のように通俗的な言い方をせず “bison” (109) と正式な名前を用いている。Obed は、Middleton の鋭い洞察力と正確な言葉遣いに驚く。実際、Cooper は、Obed の様子を “He had been struck with the stranger’s using the legitimate instead of the perverted name of the animal off which he was making his repast.” (109) と描いている。博物学の分野で “Buffon” (69) や “Solander” (69) の名声を凌ぐ業績を後世に残したいと思っている Obed は、Middleton の出現を “the prospect of an alarming rivalry” (110) と考え Middleton を嫉妬するのである。そのため彼は、Middleton の正体を確かめようとする。まず、彼は分類学の知識や “bos” (110) や “vacca” (110) などのラテン語の学名を使い Middleton の反応をみようとする。Middleton がラテン語の学名を知っていると分かると、Obed は Middleton に “...as I presume I should say, Doctor—you have the Medical Diploma, no doubt?” (110) と丁寧に話す。彼は、Natty Bumppo や Paul のような無学な者を軽蔑するが少し学の有りそうな者には下手に出るのである。Middleton が “Doctor” (110) でも “An undergraduate!” (110) でもないというと、Obed は今度は Middleton に高圧的に出る。Obed は、Middleton に次のように強く要求する。

Surely, young man, you have not entered on this important—I may say this awful service, without some evidence of your fitness for the task!—some commission by which you can assert an authority to proceed, or by which you may claim, an affinity and a communion with your fellow-workers, in the same beneficent pursuits! (111)

Obed は、博物学の研究にはそれなりの資格が必要だということである。彼は、学会の任命

書や推薦書があるならそれを提示せよと要求する。彼は、博物学者としての自分の威厳と名誉を守ろうとしているのである。彼は、常に“all my aspirations after knowledge...are, first, for the advancement of learning, and secondly, for the benefit of my fellow-creatures” (104)と高邁な理想を掲げるものの自分の名誉欲を満たすことしか考えていないのである。Obedは、博物学の研究を通して人間に仕えるという学問の社会的使命を真剣に考えていない。ましてや彼は、学問研究を通して創造者としての神の栄光を表わすという宗教的使命も全く感じていない。彼の博物学の研究は、神と人に仕える手段ではなく、個人的な名誉欲を満たす手段に過ぎない。学問研究の社会的・宗教的使命の深い結び付きを考えもしないObedは、人間と自然の関係だけでなく神と人間の間接関係をも損ねてしまうのである。

自然や人間との関係を歪めてしまうObedを考えるとき見落としてはならない重要なことは、物語の時代設定である。物語の時代は、1805年である。1805年は、第3代大統領Thomas Jeffersonが、大統領として二期目の政権を担当していた時期である。Jeffersonは、大統領に就任する以前の1785年に「ヴァージニア覚え書」を出版している。「ヴァージニア覚え書」は、Jeffersonがヴァージニアの地理的特徴、鉱物、植物、動物、気候などの博物学的に重要なことや憲法、法律などの政治や社会についてフランス人マルボア侯の質問に答える形で書いたものである。Jeffersonは、大統領に就任する以前から博物学に関心を持っていた。彼は、大統領に就任し1803年にフランス皇帝NapoleonからLouisiana地方を購入するとMeriwether LewisとWilliam Clarkを調査探検のためにLouisiana地方に派遣している。実際、*The Prairie*の物語の中でMiddletonは、“Lewis is working his way up the river, some hundreds of miles from this.”(117)とあってLewisとClarkの探検に関して触れている。Obedがノートに書き付けた“Oct. 6, 1805”(71)は、LewisとClarkの探検隊がミズーリ川を遡り太平洋岸に近づいていた頃である。「ヴァージニア覚え書」を出版しそのうえLewisとClarkの探検隊を派遣したJeffersonは、啓蒙主義の時代を代表するアメリカの知識人なのである。*The Prairie*の博物学者Obedは、啓蒙主義の精神を体現し博物学に関心を持っているJeffersonを尊敬しているのである。彼は、Middletonが提示した任命書にJeffersonのサインを見ると“What have we here!...Why, this is the sign manual of the Philosopher Jefferson!”(111)と言っている。Obedは、任命書にJefferson大統領のサインを見て驚いている。Jeffersonを尊敬するObedは、啓蒙主義の精神に通じているのである。彼は、合理主義者なのである。

物語の時代設定を引き合いに出してObedのことを考えたけれども、Obedを考える上でさらに重要なことは、*The Prairie*の出版年代である。*The Prairie*は、1827年に出版されている。この時期は、大2回目の「大覚醒運動」が盛んに展開されていた時期である。*The Prairie*が出版される少し前の1825年前後にはNew York州で福音主義信仰の持ち主Charles G. Finneyが、「信仰復興運動」の集会で説教をしていた。⁽¹⁰⁾「信仰復興運動」は、合理主義の影響を受けて形骸化したキリスト教信仰を活性化しようとする運動であるといわれている。*The Prairie*が出版され頃は、福音主義に立脚した信仰が広まっていたのである。このような時代の潮流の中でObedは、合理主義の精神に固執しているのである。合

理主義者 Obed は、福音主義信仰が広まっていた時代の流れの中で取り残された人物なのである。Obed は、合理主義から福音主義信仰へと考え方を切り替えることができなかったのである。

Cooper は、物語の中で Obed の信奉する合理主義の限界をしばしば強調している。Obed は、幌馬車に隠されていた Inez を動物と間違えていた。さらに彼は、第9章の終りで Middleton が茂みに潜んでいたことも理解できなかった。彼は、目に見えるものを合理的に判断することはできるけれども覆われて隠されているものを把握する洞察力を持ち合わせていない。彼の限界は、メシヤ Hard-Heart に対する姿勢によく示されている。復活のメシヤ Hard-Heart は、地上を離れた霊的存在である。彼は、目に見える存在でもなければ科学的・合理的に認識できる存在でもない。実際、Natty Bumppo は、茂みの背後に隠れている Hard-Heart について “He wants to face us out of sight and reason” (183) と言っている。彼は、メシヤ Hard-Heart が視覚や理性で理解できないことを強調している。ところが、博物学者で合理主義者である Obed は、Hard-Heart を理性で捕えようとしている。その結果、彼は、Hard-Heart の象徴性を理解できないのである。そればかりか、彼は Hard-Heart を “basilisk!” (182) と間違えたり人間と認めるまでも時間が掛かるという具合である。Hard-Heart の本質理解に対しては Obed の合理主義は、全く通用しないのである。Obed が偽キリストになってしまった原因は、合理主義の思考の枠組みを脱却しメシヤ Uncas と Hard-Heart の死と復活の物語を通して示されている聖書の信仰に立てなかったことにある。

注

- (1) Richard Chase *The American Novel and Its Tradition* (New York: Doubleday Anchor Books, 1957) 59, Warren S. Walker *James Fenimore Cooper: An Introduction and Interpretation* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc, 1962) 62, Joel Port *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James* (Middletown: Wesleyan University Press, 1969) 44, George Dekker *James Fenimore Cooper* (London: Routledge and Kegan Paul, 1967) 96, William H. Goetzmann “James Fenimore Cooper: *The Prairie*” in *Landmarks of American Writing* ed. by Henning Cohen (Voice of America Forum Series, 1979) 85
- (2) James Fenimore Cooper *The Prairie; A Tale* (Albany: State University of New York Press, 1985) 本論文中の作品からの引用は、全てこの版による。なお、() ないの数字は、そのページを示す。
- (3) Donald A. Ringe *The Pictorial Mode: Space and Time in the Art of Bryant, Irving and Cooper* (Lexington: The University of Kentucky, 1971) 109
- (4) 拙論「偽審判者としての Ishmael Bush」大阪女学院短期大学紀要第30号 (2000) 105-116
- (5) 拙論「Inez と Hard-Heart: Inez の救い」大阪女学院短期大学紀要第31号 (2001) 93-107
- (6) 拙論「荒野における聖餐式」大阪女学院短期大学紀要第28号 (1998) 115-127
- (7) 拙論「Natty Bumppo と Hector: 人間と自然の新しい関係」大阪女学院短期大学紀要第29号 (1999) 69-83
- (8) *The Last of the Mohicans* における Chingachgook, Uncas, Natty Bumppo と彼等の関係に関しては、拙論「Cora Munro の死の意味」大阪女学院短期大学紀要第24・25号 (1995) 77-87、拙論「Chingachgook と Magua—クーパーの神義論」大阪女学院短期大学紀要第27号 (1997) 53-62、

拙論「Glennの彼方へ—Cooperの救い—」大阪女学院短期大学紀要第24・25号(1995)109-120で論じている。

- (9) 拙論「Natty Bumppo と Hector : 人間と自然の新しい関係」大阪女学院短期大学紀要第29号(1999) 69-83
- (10) Whiney R. Cross *The Burned-Over District : The Social and Intellectual History of Enthusiastic Religion in Western New York, 1800-1850* (Ithaca : Cornell University Press, 1982) Chapter 9 The Evangelist (151-169)で Finney のことが述べられている。Sydney E. Ahlstrom *A Religious History of the American People* (New Haven : Yale University Press, 1972) 459-461, Keith J. Hardman *Charles Grandison Finney 1792-1875 : Revivalist and Reformer* (Grand Rapids : Baker Book House, 1990) Chapter 4 (59-77) と Chapter 5 (78-103) で1826年の信仰復興運動での Finney のことが述べられている。Winton U. Solberg *A History of American Thought and Culture* (Tokyo : Kinseido Press, 1983) 49, Bryan LeBeau *Religion in America to 1865* (Edinburgh : Edinburgh University Press, 2000) 95